うつら〳〵と眠るてふ。菜種は蝶の花知らず。（亂髪夜編笠）

といつたやうな廻り遠いことでは承知しない時勢になつたので、衰退しても眞に致方があるまいと思ひます。

初代河東以後の語り物は凡そ百五十段もありませう。五十段位は殘つてゐるといふことですが、よく耳にするのは、炙する巖のたたみ夜着・亂髪夜編笠・助六所縁江戸櫻・源氏十二段淨瑠璃供養・熊野等の數曲に止まります。此の數曲も十數年後に聽かれるか聽かれないか分りません。

〔九〕　江戸長唄

名は江戸長唄であるが、やはり上方唄から出たもので、上の三味線の家の杵屋が元祿頃に江戸へ下つて起したものらしく、享保の頃から次第に榮えて、寶暦明和から天明の頃にかけて基礎が出來たのであります。江戸文學が京阪文學の模倣を去つて、江戸の眞面目を發揮しだしたのも此の頃であり、豐後節の淨瑠璃の江戸化したのも此の頃であります。此の時代は文藝方面に於て、始めて江戸が獨立した時であります。

江戸長唄は爾來衰へたことがなく、今もまことに榮えて居ります。これは淨瑠璃と違つて一流一家元といふ組織ではありません。目下三味線の家元には杵屋六左衞門（改名猿若三左衞門）同六三郎・同勝三郎・同正三郎の四家があり、唄には、松島吉住・杵永・富士田・芳村・岡安・中村等の諸家があります。曲風は明快で、淨瑠璃の如く澁滯する所がありません。唄の文句も寬濶で、滑稽もあれば穿ちもあり、機智頓才も振廻してあつて、十分江戸の特質を表して居るものであります。義太夫や常磐津程各地に流布しては居りませんが、年と共に弘まつて居ります。東京には今ざつと三百幾十人の師匠が居ります。紳士學生が邦樂を學ぶとして、能樂に就かなければ、先づ此の流を學ぶがよからうといふことになつてゐると聞きます。けれども師匠の分布狀態を見ると、淺草區と日本橋區には六七十人づつで、京橋や神田や芝がこれに次ぎ、四谷・赤坂・小石川・本鄕・麹町等の諸區には七八人づつしか居らぬ

と申したら、やはり下町趣味のものといふことはお分りになりませう。

唄は總計二千もありませう。今傳つてゐる曲は二百四五十です。これに材を同じうせる群又は列と見るべきものがあつて、道成寺物・石橋物の如き能から出たのもあれば、草摺曳物の如く幸若の舞から出たものもあり、丹前物の如く全く江戸が產み出したものもあります。やはり遊里趣味のものが多數にありますが、それでも數が多いだけに品のよいのもあつて、婚禮の時の餘興にも此の流が多く用ひられてゐます。最も行はれるものを申せば、素唄物としては、二人椀久・吉原雀・吾妻八景・筑摩川・時雨西行・鶴龜・勸進帳の類、鳴物入りでは、英執着獅子・娘道成寺・石橋・勸進帳、踊物としては、淺妻・禿・伴奴・汐汲・浦島・手習子・越後獅子などが最もよく出ます。此の他、橋辨慶・花見踊・連獅子・隈取安宅・松・淡島・秋色種（あきのいろくさ）なども知られてゐる處のものであります。文句はどうせ無學な狂言作者が、よい加減に當り文句を列ねたもので、無筆者の走り書の如くで、眞に解しにくいものであります。どなたでしたか美しい寢言だと評されましたが、よく當つて居ります。けれども其の寢言の曲節が面白いので、文句の辻褄の合はない處が寬假されてゐるのであります。もと唄ですからこれに詞といふものがなく、これが淨瑠璃と區別すべき一特質でありましたが、近年新作のものには立派に詞を入れたものもあります。それに淨瑠璃の各流派たとへば一中節などで新作をするにも江戸長唄のにほひを加味して、これが後世に遺すには適當な方法だと申すのを聞いたこともあります。こんな工合で、長唄と淨瑠璃とは接近する傾向があつて、江戸長唄が目今最も優勢らしいのであります。發達改善の見込は最も此の流にあらうと考へます。

〔一〇〕江戸端唄

江戸端唄卽ち歌澤節は近く六七十年前に起つたものであります。旗本の隱居笹本金平（笹丸）が御家人の柴田金藏や畳屋の虎右衞門と共に諸流の長所を採つてこしらへたものであります。歌澤と哥澤の二派に分れて、一は芝金を家元の名とし、一は虎右衞門を代々の名と致して居ります。今の哥澤芝金は四代目で、歌澤虎

右衞門は三代目で、共に婦人であります。ふしまはしの纖細悠揚は他に比類がなくて、眞の江戸前だと申す人もあります。唄は三百首餘りあつて、其の半は兩派に共通であります。全く御座敷向のもので、長唄や淨瑠璃の如く芝居で唄ふものではありません。歌の作者は通人連で、何れも俳諧には通じてゐた人達らしく、作曲者には清元才兵衞も居れば一中節の都傳内も居つたと申します。各流から採つて作つたもので、特色はクリとケシの所にあると申します。よく出る歌はどなたも御承知でせう。槍はさびてもや、梅にも春や、わしの國さや、一聲はの類は少し器用の者なら覺えてゐます。別段發達するものでもありますまいが、低唱微吟には至極適してゐますから、四疊半趣味の存する限りは行はれることでございませう。師匠は何人程あるか、十年程前にはそれを職業と明に答へた者はなかつたと見えて、東京市の職業調査には出て居なかつたやうに思つてゐます。

〔一一〕箏曲

現今の箏曲には、生田山田の二流があります。生田流は生田檢校(正德五年歿)の流を汲むもので、多く關西地方に行はれ、山田流は山田檢校(文政十四年歿)の創めたもので、多く關東地方に行はれます。山田流は歌のふしに淨瑠璃の河東節や富本節を加味したもので、生田流に比べると、其の詞章も曲節も共にずつと艶麗で、潤ひに富んで居ります。つまり生田流は巧緻極まる手事に長じ、山田流は唄で勝つてゐるのであります。處が近來に及んでは山田流も大きに手事を彈き出したので、生田流の長處はます〳〵これに吸收されさうに見えてゐます。箏は全國各地に流布して居ますので、生田は角爪を用ひて正面を向いてひく位のことは、どなたも御承知のことでありませう。兩流共に組歌といふ古風な曲を傳へ、此の外に長歌・端歌・手事物などの名の下に百二三十曲は行はれてゐます。何が手ほどきで何がよく出るかは流派によつて違ひますが、これも人々の知り悉して居ることでございませう。

東京は殆ど全部山田流ですが、師匠は江戸長唄と同數だといふことであります。

明治四十一年の調査には、二派共に師匠の數は三百四十人でありました。箏曲は中流から上流にかけて、江戸長唄は中流から下流にかけて行はれるが、共に師匠の數が同じといふ處に、二者の勢力の略相等しいことが知られると思ひます。箏はくだらない、聽くと眠いといふ人がありますが、一般には先づ無難なものとして許されてゐます。けれどもこれも淨瑠璃の各派同樣、新時代の新音樂に發達して行けさうにも見えません。多少の新作はあつても、何れも舊型を蟬脫しないものばかりのやうに見受けます。

〔一二〕　邦樂の前途

以上述べた所で邦樂各派の現狀はざつとお分りになりませう。能樂・義太夫節以下一切のものは、全く封建時代の作物を繼承して居るに過ぎません。勿論此等のうちには、永世殘るべき價値のある歌も曲もありませうが、過去の遊里趣味の上に構成されたものの如きは、最早葬り去らるべき運命のものといはなければなりません。助六劇・夕霧劇・忠臣藏劇の存する間は、此等の附屬物として作られた曲は用ひられることでありませうが、これは保存されるのであつて、現代と調和してゐる爲に生き存らふべき狀態に居るのではありません。吉原の衰退は豐後淨瑠璃の富本や淸元に取つては大打擊であります。江戸淨瑠璃や江戸長唄にしても、其の世話物くさい作に出る女は、多く吉原式の遊女であります。普通の女はお七・お夏・お染・お千代・おはん・お駒等數人に止まります。多く出るものは小紫・高尾・揚卷・浦里・松山・夕霧・梅川・吾妻・奥州、何れも皆遊女で、それが吉原式の意氣地と張りともう一つ情愛に富む人間にしてあります。さうして此等の人々の事蹟を綴つたものに名曲が多いのであります。當時にあつては吉原が交際の中心地であつて、全く時勢が此等の作物を產み出したものと見なければなりません。又時代物にしても、小町物・曾我物・山姥物の類、何れも皆遊里の模樣を寫して、觀客の喝采を博したのであります。明治の中年以後、能樂の復興と共に、鶴龜・勸進帳・老松・道成寺・橋辨慶の如き、能と題材を同じうせるものが喜ばれる傾向があつて、此の點に於ては江戸長唄

が歡迎されて居ります。吉原の衰退と共に、江戸淨瑠璃は力を失ふべきで、もつと進めていへば、封建制度の撤廢と共に存立の資格が失せ出したのであります。其の上四民平等となつて、腕次第でどの方面にも活躍出來るやうな世になつては、藝人になつてゐて、弱い者扱をされるのは馬鹿々々しく感じる筈であります。明治維新後、藝人で商賣替をした者の多かつたのも無理はないのであります。又藝に從事してゐる人の中には、自己の地位を高める爲に、藝を上品なものにしようとして、曲風を改めた者もあるが、これがそもそも〳〵藝を面倒なものにする基でありました。一二の流の如きは、面倒にした結果、行はれることが滅じて來たと申します。

明治維新と共に、舊邦樂は精神の上に於て滅びたのであります。實際維新後各流派共に餘り新作を出して居りません。年々の歲旦物さへ極めて稀に出てゐます。今家元と稱する人々の手に成つた曲は極めて少數で、天明寬政から嘉永安政にかけて年々各流派に二三四五の新作があつたのに比しては、非常な懸隔があるといはなければなりません。さうして洋樂の輸入以來、舊型を追つた在來の音樂は、全く新時代の新人の趣味に合はなくなつて來たのであります。しかるに現代の藝人には、

1 自分の流が自分限りで亡びても構はないといふ家元。
2 流儀は傳へたいが、面白くないから仕方がないとあきらめてゐる者。
3 まだ滅びはしないと高をくゝる者。
4 どうでもいい、差向金をほしいといふ者。
5 流派はどうでもいい、自分だけ上手だとほめられたいといふ者。

はあつても、

1 後繼者を養成しよう。
2 時代に合せて、文句や曲節の上に改善を試みて新作をしよう。
3 他の流派と合同して、綜合藝術を作り上げよう。

といふが如き意氣込の者は殆どないのであります。いはば其の日暮し自分一代の事をのみ考へる者が多いのであります。明治維新前には、大名・富豪・遊里の如き

藝人に對する保護者があつて、藝の發達向上を圖りました。而して藝人は其の當時に於ては、眼に文字もあれば世相にも通じてゐる者であつたが、愛嬌を商賣とする身と自ら抑損して、敢て驕りたかぶらなかつたのであります。然るに近年は知識に於て劣り、志操に於て劣り、おまけに藝まで劣つて來たのに、驕りたかぶることは前代に超過するやうに思ひます。更に憂ふべきは、よい意味の保護者がなくなつたことであります。今の保護者は、兎角藝人に對して生活の保障はしてやるが、藝の向上發達に對しては途を明けてやらないやうに思ひます。

河東・一中・富本等は前途が危からうといふことであります。殘る者は能樂・義太夫・常磐津・清元・江戸長唄・箏曲の六流でありませう。江戸端唄も殘りませう、新內も一部には殘りませう。殘つても今よりもつと榮えようとは思はれません。榮えるものは江戸長唄かと思ひますが、これだと云つて、將來の日本音樂として恥しくないまでに發達するかどうかの見通しはつきさうもないのであります。

將來の邦樂は如何にすべきか。これに家庭向と御座敷向と公衆向との三種類を要しませう。家庭向としては、箏曲でも江戸長唄でも、義太夫節でも何でも構ひません。人々の好次第で、ピアノやバイオリンでも結構です。ただし純粹器樂としては月琴か箏曲か尺八位しかない邦樂の領域に於ては、どうしても歌が主になつて、樂器はほんの伴奏器といふことに止ります。とすれば文句にも十分注意すべきであつて、これには大いに改善を加へる餘地があると思ひます。其の改善は加筆修正よりも寧ろ新作をすることにして、題材も現代式にするがよからうと思ひます。萬代不易の人情を詠ふには、在來の材料でもよいが、それと共に現代の人の氣分に合するやうな新事物をも採るがよいと思ひます。しかし繪畫の題目が年々更に改まらない所を見ると、音樂にばかり此の事を望めないのかも知れません。次に燕樂のお座敷向としては、當分の間は三味線を伴奏器とした音樂であらうが、それも人々の好に任すべきで、在り來りのもので間に合ひませう。

殘る處は公衆向の音樂、多數の人に同時に聽かしめんとする音樂であります。これは現代に至つて始めて必要の生じたもので、當に作らるべくして未だ出ない

處のものであります。恐らくはオペラ用式の大がかりのものが最もよいかと思ひますが、之を作り上げるのに、

1 洋樂丸輸入。
2 洋樂に多少日本の樂風を加味する。
3 日本樂を主にして洋風を加味する。

の三法があらうと思ひます。自分は樂器は外國の物でも何でも構はないといふ考へで、どうかして知識階級の者が滿足する新音樂が一日も早く出ればよいと思ふのであります。洋樂にしても之を味ふには素養を要し、邦樂にしても相當に素養を要するのであるが、どちらも素養を要するとすれば、藝術的價値の多いものを選ぶべきであると思ひます。

けれども此所で考ふべきは、それが日本國民性の上に建設されたものでなければならぬといふことであります。ややもすれば「一體日本に音樂といふものがありますか。」といふ問を出す人がありますが、日本には日本の音樂があるのであります。日本の音樂は、洋樂程には聲樂と器樂が分離して居りません。兎角文句が主になつて、其の文句のふし廻しと、これに附隨する踊の所作や舞臺面を聯想しなければならぬものが多くて、どうしても文句の筋卽ち一篇の趣向を知つて居ないと、眞に理解は出來ぬのであります。此の點に於ては、或は洋樂の發達した器樂を聽く場合などとは違ふかも知れないが、此の點が違ふ爲に、日本のは音樂ではないといふ譯には行きません。たとひ我が音樂は低級なものであるにしても、これが我が國民によつて作られたものであるから以上は、之を助長させるがよく、助長させる見込のある間は見すてゝはならぬと思ひます。

舊邦樂の題材や文句はあまりに現代ばなれのした物となりましたが、其の曲節は必ずしも現代人の嗜好に合はないのではありません。將來の新音樂を構成するに際しては、各流派といふやうなことを全く忘れてよいと思ひます。もと〳〵さう大差のあるものではありません。宜しく童謠俚謠一切の民謠をも加へて、日

本音樂總體のふしを材料として、洋樂の形式に則るなり折衷するなりして、一種の新綜合的作品を作り出すべきであると考へます。洋樂の丸輸入、舊音樂の廢棄は、國字を羅馬字にして、假名や漢字を廢さうとすると同様です。

今は全く昏迷の時代であります。我等は外國の書を熱心に讀む時には、何となく洋樂までが面白く感じます。けれども理窟を去つて、市井の間に談笑する時には、やはり邦樂の方が面白くなります。洋樂をけなすものも、邦樂を忌む者も、共に食はず嫌なのでありますまいか。現代の邦人は少し金が出來ると、先づ遊蕩の滿足に走り、次いで家屋を作ることに腐心し、次いで骨董を玩んで此の世を去るといふ順だと聞きますが、學問時代には洋樂が面白く、遊蕩時代には邦樂が面白く、それから晩年まで邦樂が面白いといふ人が多いのではありますまいか。要するに今はまだ新音樂作製の準備時代であります。政府や社會はこれに對して如何なる施設を致して居りませう。唯一の官立音樂學校は專ら洋樂を授けて、邦樂に關しては、箏曲科を分教場に置くことと、能の囃子方を養成することと、邦樂の調査をして居ることに止まります。まだ三味線科は設けてもありません。私立の音樂學校も概ね洋樂を主にして居ります。ただ個人教授に於てのみ、邦樂は大多數を占めてゐますが、此の教授は傳習的で、研究的ではありません。作曲者養成が急務であるが、そんな事は一向考へて居りません。

將來の音樂は之を建築に喩へて見たいが、煉瓦造式となすべきか、純日本式の木造となすべきか、木造洋館式になすべきか、純日本家屋の棟續に洋館一棟といふが如くになすべきか、洋館ではあるが、中の裝飾は一切日本物といふ度合にすべきか、まだまるで見越しのつかない時であります。此の時に際して望むべきは、新作曲家の出現であるが、それが何時出るか分らないのであります。よつて其の出現を促すべき狀態を持續すべきで、それには或者は建築材料を蒐集し、或者は樣式を論じ、又或者は裝飾方面を考へるといふが如くにすべきで、我等は今其の建築材料の保存と整理とに力を致してゐるのであります。さうして新樣式新裝飾は、學者や

先覺者諸君に於て宜しく研究され發表されんことを希望してゐるのであります。

平安朝時代の雅樂は朝廷の保護によつて榮え、室町幕府時代の能樂は將軍の保護によつて大成し、義太夫は大阪町民の歡迎裡に、江戸淨瑠璃、江戸長唄は江戸町民の抱擁によつて出來上つたのである。今や此の貴族趣味、町民趣味以上に、新時代の新國民卽ち全國一般の智識階級の者の歡迎によつて榮ゆべき新邦樂が出現しなければならぬのである。さうして智識階級の滿足すべき音樂は、智識階級によつて唱道され、且つ實現せられなければならぬのであります。此の點に關して特に諸君に御考慮を煩したいと思つて、此の壇上に立つたのであります。

五　邦樂の將來

（大正十五年三月稿）

「パパ、〇〇子は一中節や蘭八は習ひませんよ。三味線は大嫌ひ、ピアノを習ひます。」

雙葉幼稚園に通ふ可憐な令嬢が雛壇を前にしてその父に向つて、一息にかういつたのは最近の眞事實である。八歳になつたばかりの子供にかういはせるには何の幼稚園の教育法が與つてゐることでもあらう。又この子の叔母にソプラノの唄ひ手として前途の遠大に嘱目されてゐる人のあること、母なる人が邦樂よりも洋樂に趣味を有してゐられるらしいことも與つてゐるであらう。けれどもその邸宅には一臺のピアノも備へつけてない。父なる人は東大商科出の手腕家で、東京近郊の大工場の經營に當つて、不景氣知らずの社運を拓いてゐる。曾ては商業視察のため世界を周遊したこともあつて眼界は廣く、趣味も多方面で、洋畫の鑑賞には特に長じてゐるが、音樂に關してだけは洋樂よりも邦樂を愛してゐる。角帽時代歌澤の家元へ通つて、一かどの唄ひ手であり、轉じては一中に凝つて、黒人にあつといはせる技倆があり、近年は蘭八節に凝つて、一中の師匠と蘭八の師匠と一夜おき位に來るといふ家庭である。樂器として押入の中に藏せられてゐるもの

は、三味線だけで、主人もボツンボツン位はひける。

私はかういふ家に育つた一人娘の眞直な人の口から、邦樂殊に三味線樂に對するお斷りの出たことに對して驚くべきであるかも知れないが、私は驚かなかつた。却つて私が日常想像してゐることが間違ひなく實現される日が三十年を經ないで來ることが證明されたかの如くに感じた。私はその父に對して「令嬢のこの言をきかれて邦樂の將來をどうお考へになりますか」と尋ねた。卽座に「邦樂のつぶれることは決してありますまいが、變ることは大いに變りませう」といふ答へがあつた。これも私が日常抱く考へと同一で、ここにいふ邦樂はいふまでもなく從來行はれてゐる謠曲や、長唄・端唄・淨瑠璃又は箏曲等に對しての意であつた。私はこの人すなはち江戸文化爛熟期に成つた唄や淨瑠璃の歎美者で、音樂の姉妹藝術のすべてに對しては、むしろヨーロッパ趣味の物を喜ぶ人に對して、將來における邦樂の變り方について、問を發せずにはをられなかつた。それに對する答へは「江戸長唄が何時までも行はれませう、義太夫や常磐津も、かの聞きばえのするさはりの處はやはり殘りませう」といふ處までで、來客のために意見の底をたゝくことは出來なかつた。しかしそれで十分であるべく、それ以上は私の考へをつぎ足して、所說の當否を判斷してもらふことにしたいと思ふ。

民本主義といふことがどんなに實現されても、政府の施設はいつも一國文化の展開と色彩とに至大な關係を有すべきは改めていふまでもないことであらう。現在における施設の當否は人によつて意見が異なるであらうし、私もしばらく可否を離れて、述べることにするが、わが政府の執る處は、邦樂に對しては放任的だといふのが最も當つてゐよう。ストトトン節の如き頽廢的氣分をそゝるものに對しては禁止の意思を示すが、過度な感傷氣分を有する曲が行はれても、かつて一度もそれが問題とされたことはない。國民もやはり默視的の態度で、日露戰爭當時のラッパ節や數年前のさすらひの歌といつたものに對しても、深い鋭い論議を交換しなかつた。演劇脚本の檢閲が周密愼重なのに反して、謠ひ物や語り物には官權の制裁の手がさう延べられてゐないことも事實である。概言すれば邦樂に對し

ては、政府も國民も消極的だといふことにならう。

之に反して洋樂に對しては政府は積極的の態度を取つてゐる。邦樂教育に關しては調査といふ事が考へられ企てられたが、何も決定されずに終つたに反し、洋樂だけは唯一の官立音樂學校において、四十幾年來授けられてゐる。この學校には、何時も三四の外國教師が雇はれてをつて「こゝでは自國の音樂は教へないのか」とその人たちは來朝當座にはきつと尋ね、私たちは靜かに「さうです」と答へて落着いてゐなければならないのである。恐らく政府も國民も邦樂は成行きに任すべきものとして考へ且つ取扱つてゐるものとすべきであらう。かういふ情勢の下にあつて奮起すべき者は、邦樂諸派の樂手諸君であるべく、諸君は新代新人の新趣味にも合致すべき曲の製作と唄方とに力を致すと同時に、歌詞の作成を新詩人新文士に需めて時代に適應することに努めなければならないであらう。河東・一中・新内・富本・薗八の諸流は遺存するといふだけである。かのうた澤は御座敷趣味のゆたかなものであれば遺りもしようが、義太夫・常磐津・清元の如き演劇關係の濃厚なものはどうなることであらう。これ等は舊劇が如何に傳はるべきかに隨伴すべき問題で、歌舞伎劇のあらん限りはその出端に、その振事に用ひられるであらうが、近來築造される大規模の劇場は樂手諸君に曲風と唄ひ方とに對して少からぬ改善を促してゐるのである。幕張は十幾間に上つて、見物二千五百を收容しようといふ歌舞伎座の如きは、隨分音響につゐて工夫してあるにも係はらず、後部の椅子にゐる者には、淨瑠璃の半分は聞き取れない。延壽太夫や松尾太夫の聲量を以てしても、節尻の面白い處は聞き取れないうらみがある。たゞ義太夫と江戸長唄とだけが、これに對して強みを有してをれば、かの新しい令孃の父なる人の言に承服しなければならないであらう。たゞし改善の見込の乏しさは、義太夫は謠曲と相當るもので、操り劇がいつまで存續すべきか、演能がいつまで行はるべきかについて、前途に光明を認めない者は、同時に曲風の頽廢と崩壞とを想像して靜かにさびしい思ひを抱かなければならないであらう。誰も江戸長唄だけはといふ。成程江戸趣味の輕快はある、流暢はある。從つて明るくもあり陽氣でもある。あつて

もこの刺戟澤山な世に育つ青年少女諸君は、まだ〳〵くひ足りないものとして、中年者のわれ等の半分も刺戟を感じないことは爭ひ難い事實である。ましてその後から續く幼年者が自己の好き嫌ひによつて動かうといふ未來に對しては、江戸長唄だ處で大改善、否あらゆる諸流の長處をとり入れると同時に、もつと〳〵民謡ぶりを增加し、新人の好みを參酌して、深刻味に富むものに作り上げなければならないであらう。

邦樂の將來を思ひ、在來樂の前途を想像しては、私は幾度となく邦樂に流派別などはないものと考へて、和洋融合の渾成に向つて進むべく、夫には偉大なる作曲家の出現を祈るべく、常にその人の出現すべき空氣の醞釀に努力すべきであると說いたことであつた。近來洋樂のみを修めた青年音樂家の手に成る曲に當然すぎる程當然だが邦樂の味と色とが取り合はされて來た。この傾向は勿論繼續すべく、又せしむべきで、十年二十年の後には現下の小曲とは比べ物にならない大作が出ることであらう。邦樂方面の作曲家にあつても洋樂との接近に對してもつともつと工夫すべきであらう。それが決して自國を輕んずる譯でも何でもない。取長補短は建國以來の國是である。この和洋兩樂家の歩み寄りが產む音樂でなければ、決して新日本の邦樂と稱し得られないであらう。孫を愛する時であらうか。こひねがはくはその令嬢が子を抱く時であらうか。孫を愛する時であらうか。さうしてその作成はかの結婚後間もなくかの人達の間と和洋樂の間とに、よい意味の新しい胎兒が勇ましい產聲を揚げるといふやうな進行を取つてもらひたい。

日本演劇の研究 終

五　邦樂の將來

大正十五年七月十二日印刷
大正十五年七月十五日發行

日本演劇の研究

定價金四圓

著者　高野辰之

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地

印刷者　植田庄助
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

發兌　改造社
東京芝區愛宕下町一丁目一番地
振替東京八四〇二番
電話銀座四五八番

常磐印刷株式會社印刷

阿部次郎著	北郊雜記	菊半載 上製	定價一圓九十錢 送料十八錢
阿部次郎著	學藝論鈔	四六判 上製	定價二円二十錢 送料二十錢
植田壽藏著	藝術哲學	菊判 上製	定價二円七十錢 送料二十四錢
瀧精一著	文人畫概論	菊判 上製	定價二円 送料二十錢
板垣鷹穗著	美術史論集 表現と背景	菊判 上製	定價三円八十錢 送料二十二錢
岸田劉生著	圖畫教育論	菊判 上製	定價三円五十錢 送料二十二錢
矢代幸雄著	太陽を慕ふ者	四六判 上製	定價一円五十錢 送料十八錢
木下杢太郎著	支那南北記	四六判 上製	定價三円 送料二十二錢
芥川龍之介著	支那游記	四六判 上製	定價二円 送料二十二錢
富田溪仙著 下店靜市編	溪仙八十一話	菊判 上製	定價三円 送料二十六錢
厨川白村著	苦悶の象徴	四六判 上製	定價一円八十錢 送料二十錢
吉江喬松著	近代文明と藝術	四六判 上製	定價二円 送料二十錢

ミナサンの古本屋
庶民文庫
小田急代々木上原